



獲れない日々が育んだもの。

西村雅裕氏の四万十川釣行へ同行することから小林厚治のアカメへの挑戦は始まる。彼の行動力は、遠征釣行という非日常を限りなく日常に近づけた。日々の多忙な仕事をこなしながら休日には飛行機に乗り、アカメの棲む高知の水辺へと向かう。同じようにフットワークが軽く、気の合う釣友がいたことも、彼の行動力を支える一つの大きな理由であったのかもしれない。

高知遠征を繰り返す中で彼は、釣果を手にすることはできないもの、信じられないような光景を何度も目の当たりにする。ルアーをビックアップする瞬間、目の前で水面が爆発した。

量一量分はあるうかという巨大アカメのミスバイト。あまりの巨大さと迫力に、言葉も出なかった。アタリをとり、フッキングしたことも幾度もあった。しかしあまりのパワーに押しまわられ、針を伸ばされる。つぶされる……

やがて彼の遠征への情熱は九州のヒラスズキへとシフトし、徐々に高知から足が遠のいて行つた。

高知から離れても、もちろん彼の釣りは終わらない。釣行を繰り返す日々の中で、たくさん仲間との関係を育んでいく。

特に、かつて西村氏と共に結成したフィッシングチーム Tokyo Sea Paradise としての活動は全国へと波及し、シーバスアングララー達の繋がり育てる、大きな礎を築いた。

東京湾や房総半島など関東の海や河川をホームに、陸っぱり、オフショア、ウエーディング……あらゆるスタイルで日々の釣りを仲間たちと楽しみながら、長崎の五島列島のヒラスズキや大分河川のリバーゲーム、駿河湾のオフショア等、遠くに良い魚がいると耳にすれば、遠征に出てその地の仲間とともに釣りに挑んだ。

さらに彼が二期バスプロとして活動していたことを、知る人も少なくはないだろう。ありとあらゆるフィールドで魚を追求める中で彼は常に仲間を大切にしていた。出会いに感謝した。そしてどんな相手にも気さくに、丁寧に話をし、耳を傾けた。

小林厚治というアングララーは、抜群の技術と経験を持ちながらそれに奢らず、釣果に貪欲でありながら、決して人を押しつけることをしなかった。人との出会いが、釣りのある人生をより広く、より豊かにしてくれることを身を以て知っていたからだろう。

……時は過ぎた。シーバスフィッシングの黎明期を歩いてきた彼等の後に続く次世代のアングララーが、四国の地で再び彼とアカメという魚を結びつけることになるのだ。

